

國學院大學學術情報リポジトリ

トポスとしての架橋伝説：
特集日本民俗学の展望を拓く：
伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花部, 英雄, Hanabe, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000268

トポスとしての架橋伝説

花部英雄

一、蹴裂伝説と自然地形の問題

漁師を含めた狩猟民は、一般に獲物を根こそぎ、根絶やしにするような乱獲は避ける。それは永続的な捕獲を続けるために、資源管理の調整を行なうからである。そのために禁猟時期や幼獣（魚）保護の規制を設けたり、祭神化による儀礼を行なったりして、資源保護を生物の論理にもとづきながら自然との調和をはかっているのである。

一方で、陸上の開発等による自然破壊について、その対処も

含めてどのように考えてきたのであろうか。農林業、鉱業などの活動が必然的に起こす自然環境の改変をどのようにとらえ、その合理的な説明の言葉を残してきたかに関心を持っている。グローバルな地球環境の保護への取り組みが話題になる現在、日本の民衆レベルでの環境問題を、伝承の言葉から探っていくことが本稿の課題でもある。

こうした問題を考えるのにふさわしい近年の成果として、野本寛一『神と自然の景観論 自然環境を読む』（講談社学術文庫、二〇〇六）、および上田篤・田中充子『蹴裂伝説と国づくり』（鹿島出版会、二〇一一）を取り上げることができる。野本は

同書で、人と環境とのかわりを「信仰」を基礎にとらえていく。日本人の原初的な神信仰を生成するような場所を「聖性地形」と呼び、これを環境問題の原点として、ここから地質や地形、樹木などの自然環境の諸問題の解明を試みた。その結果、環境がいかに信仰に彩られて私たちに受け入れられているかを可視化して見せたと評価できる。ただ、環境が古代から大きく変わらず今もそこにあるという前提に立った発想で、いくぶん自然環境を静観的にとらえている印象を受ける。

これに対して、上田・田中の『蹴裂伝説と国づくり』は、今ある自然は自然災害や人為的な土木工事などの結果であるという点から自然地形を問題にする。自然地形を生産向上等のために改造したと伝える伝説に「蹴裂伝説」がある。『神話伝説辞典』（東京堂出版、一九六三）によると、「ある神や英雄が溪谷や湖沼の一方を蹴裂き、もしくは切り開いて、悪水を流してやることを説く型の伝説」のこととある。

上田は前掲書の「はじめに」で、日本列島は硬い岩盤ではないために地殻変動による火山爆発や地震が起こりやすく、また豪雪、豪雨により山の斜面が多く削られるなどしてできた沖積平野の多い地形に特徴があるという。それに加え、人為的に自然地形を改造してきた歴史があるとして、国土の生成を蹴裂伝

説からアプローチしていく。本書では一〇の事例を取り上げるが、他にも同数の事例を数えることができるという。

ところで、野本と上田・田中とも同じように自然環境を話題にするが、その自然が所与のものであるか、改造されたものであるかといった出発の議論によって伝説の理解にも大きな違いが出てくる。たとえば、長野県に安曇平^{あづみだら}という広大な盆地があるが、かつてここが湖であった時に、これを泉小太郎が母の犀^{さしりゅう}龍と力を合わせて蹴破って水を流して平地にしたというところが、江戸中期の『信府統記』（信濃史料編纂會編、大正二年）に出ている。この伝説を安曇平野の壮大な眺めを遠望しつつ構想した物語と見るか、実際に開鑿^{かいさく}した事実の延長上においてとらえるかでは大きな違いである。換言するならば、伝説を地形から見た幻想ととらえるか、伝説から地形を解釈していくか、という議論の違いともいえる。

さて、本稿は両者の観点に立脚しつつ「地形と伝説」の問題を取り上げていく。伝説を觀念の所為とするだけでなく、いつて歴史事実だけに還元させることなく、両者の間に伝説が存在するという認識から出発したのである。その場合の拠り所として、伝説を伝える人々の「生活」に視点を置いて見ていくことにしたい。具体的には、一夜に橋を架けようとするが邪魔に

遭うという内容の「架橋伝説」を、地形や地域の場所性を問題にしながら解明していこうとするものである。

二、鳥取市御熊の架橋伝説

架橋伝説については、前に「架橋伝説と材木石」（『草莽の口承文芸』3、國學院大學口承文芸研究会、二〇一六）という題で、少し書いたことがある。この伝説は「九十九谷伝説」とも関連するが、九十九谷の場合は、谷などが一つ隠され百（あるいは千）に満たないために霊場化を諦めるといふ話である。それに対して架橋伝説は、一夜で終えるはずの架橋作業が、敵対者の策略で夜明け前に鶏が鳴いてしまったために中止となり、作業場等にそのまま材木石や橋桁などが残ったと伝えるものがある。一方は数、他方は時間の限界といった違いはあるが、話の構造は似ており、いずれも不成立、未完成を説くものである。

ところで、ここでは前掲の拙論で紹介できなかったもののうち、実際にその場所を確認してきた伝説を取り上げていくことにする。最初に鳥取市御熊の事例を上げる。山陰線の末恒駅から五キロほど山手に行くところ御熊神社があり、斜面にある社の辺りに材木に似た石が地表から突き出ている。記録された古い文

献の『稲葉民談記』（『因伯叢書』名著出版、一九七二）の「三蔵社」に次のようにある。

高草郡三蔵と云ふ村の辺にあり、桂大明神と号す、此社のうしろの山の岸の土の中より、石の柱の一端二尺三尺或は四五尺計り重り合ひたるま、突出て、見ゆ、柱のふとさ二尺まはり三尺まはりあるべし、其形或は四角或は八角六角、そのま、材木のひきものなどを立てたる様にもゆるなり、或は又其近辺その社へ登る階壇なども皆かくの如き石なり、土人語り傳ふるは此社の神、曾て石の橋を造りて、隱岐の国に渡らんと、一夜の内に造り立てんとせられしに、夜あけて事成就せずして其儘捨置かれし跡なりといへり、葛城の一言主の神のことを髣髴するに似たり、昔より云い傳ふる事にや、

著者の小泉友賢は因幡藩士で、「京都で医学を学び、江戸で林羅山に儒学を学ぶ」（『山陰の古書』⑬、一九七七）という経歴の持ち主で、帰藩して寛文十年（一六七〇）頃から亡くなる元禄四年（一六九一）の間にかけて、『稲葉民談記』は書かれたとされる。現地を訪れた際に土地の人からの言伝えをもとに



御熊神社と柱状節理

記したものとと思われるが、材木のような石の柱が乱立する光景を驚きの目で眺めたにちがいない。この石の柱は、マグマが地表に湧出し固結する際に収縮して起こる現象で、地質学でいう「柱状節理」の岩塊である。架橋伝説の多くは、この柱状節理にまつわって伝承されている。

この奇妙な材木石を実際に見、そして土地の人から神が隠岐に橋を架け渡すために用意したものと聞いた友賢は、「葛城の

一言主の神のことを髣髴する」と記したのは明晰である。一言主の神が葛城山中で架橋の仕事をしたため、役行者に呪縛されて谷底に捨て置かれたという故事は、十世紀末に書かれた『三宝絵詞』などに見えている。おそらく葛城山中の架橋の残骸も柱状節理かもしれない。とこ

ろで、この友賢の記事を読み、一言主の神の事跡を調べた者は、伝説の共通性を理解するであろう。事実、この『稲葉民談記』から百四十年後に書かれる安陪恭庵『稲羽志』(『因幡志』世界聖典刊行協会、一九八二)の「御熊村」の項に、一言主の神に触れて「此神の故事日本紀神代巻に見へ」と記す。このように書承による展開の中で、新たな情報が加わり補筆、発展していくことになる。こうした過程を経て全国的に伝説が統一化されていく結果にもなるのであろう。

それより興味深いのは、『稲葉民談記』に触発された上野忠親は実地に赴いて調査した報告を宝暦二年(一七五二)の『勝見名跡誌』の「三倉村」に残している。二千字に及ぶ記事には、材木石の細かな観察の他に、この石を家々の踏石等ふみしに利用している事実や、それを伐り出すための「鉄道具ヲコシラヘタル神社ナリトテ末社ニ鍛冶大明神ト云フアリ」と記している。専門の石工が入って材木石を採取していたことがわかる。この材木石に強い関心が寄せられていた証拠で、そのことが伝説の形成にもインパクトを与えていくことになるのであろう。記述はさらに、この材木石が神社周辺だけでなく、尾根伝いにも所々にあり、それが半里先の海にまで続いていると述べる。記述のその先を記すと次の通りである。

海ノ端マテ出タル山ノ鼻ハエ（江）ニ連タル金ガ崎ト云
 フ山アリ金カ崎ヨリ出タル海ノ底モ橋柱ヲ立タルヤウニ豎
 サマニ立タル石ノ柱ニ横ニ石ノ柱ヲ渡シテ組立タル如クニ
 見ユル所四五町アリソレヨリ沖ノ方モ上古ハ斯モアリツラ
 メドモ大濤ニクヅレタル方末ツヅカズ海ノ底ニクヅレタル
 石ノ柱アリト昔舟磯ト云フ所ニ居タル老女ノ白水郎ノ咄ナ
 リ是ヲ伏野ノ村人ニ尋ヌレバ成程其咄ニサモ相違ナシ春
 三四月ノ頃風モナク浪シツカナル至極ノ晴天ノ時ニハ海上
 処々ニ石柱アラハレテ見ユト云ヘリ（『勝見名跡誌抄』）

金ガ崎山から白兔海岸に出ると、少し突き出た気多力前があり、その岸から海面に岩場が薄っすらと見えて、一〇メートル先の淤岐ノ島へと続いている。干潮時には歩いて渡れそうに見えるが、その島からさらに沖の方に「石ノ柱」が繋がっているのである。『勝見名跡誌』の著者は、御熊神社の材木石が海底にまで続いている地形を、海女から聞き取りしたことを記している。海で暮らす人々にとって石の柱が隠岐の島に架ける橋であるという幻想は受け入れやすいだろう。

また、こうした奇石が出土するこの地域の不思議を、この著

者は「是レ何ト云フ神跡ナラン此地ニハ大穴牟遲命ノ到リマシタル気多カ崎ナレバ如此神変奇妙ノ事跡今ノ世マデモ遺リ傳ハリケン其イハレノ絶テ知レザルコソ遺憾ナレ」と結んでいる。大穴牟遲命の「八十姫訪問譚」の文脈において、材木石の不思議をとらえようとしているのである。柱状節理という不思議な石への連想を、神話的世界との関係において解釈しようとするのは、柱状節理の石を現実生活に利用している人々とは異なる発想である。「架橋伝説」が立場により新たに解釈し直され、重層性を帯びていく様子が見える。

三、隠岐・道後の「天が橋」伝説

御熊の神が架橋しようとした目的地の隠岐にも、同種の伝説がある。平成一〇年刊の『西郷町の民話』（西郷町教育文化振興財団発行）に、隠岐の島町今津の「天の橋」にまつわる伝説として、次のように掲載されている。

天の橋いつてねえ、橋があつてね、そいがちようど向こうに島前の島が見えるところでね、そいでまあ、そこまで橋掛ける言つてねえ、そげしたけども、わずか何メートルか



隠岐の島町今津の「天の橋」

ほどしか長さがないけど、そいでよう掛けんで、まあ、そいほどの今こつちの人は天が橋、天が橋言つてね、おるけど、昔、その島前まで橋掛けるいう、その坊さんいったかそいう人がおつて、そいでまあ、途中までそうほど普通請して、そいでまあ、後はだめになつてねえ、そいで今ちよつと言い伝えみたいなことになつて、まあ、それほどぐらいな話ですが。

直接の聞き書きらしい口吻である。ただ、なぜ「天の(が)橋」と言うのか、また「坊さん」とはどういう人なのか、疑問は残る。そこで、直接に今津を訪ねて聞いたが知っている人はいない。ただ、その場所を以前は火葬場に使っていたらしいということとはわかっ

た。語り手の村上シミさんは昭和二年生まれというのでお宅を訪ねると、本人はすでに亡くなっていたが、後を継いだご長男の村上繁昭さん(昭和二三年生まれ)が、天の橋の話を寝物語に聞いた記憶はあるが、内容までは覚えていないという。そして、近くに住む姉にも聞いてくれたが知らないという。伝承は途絶えかかっているが、しかし、その場所に対する記憶は姉弟とも鮮明である。天が橋には近づかないように厳しく言われ、また、その辺りで潜ったりすると、火葬された魂に海へ引き込まれるからと脅かされたという。また、橋の辺りの海には深い穴があり、それはここに流されてきた人が、帰りたいくて掘った穴だとも聞かされていた。隠岐は流人の島でもあった。

そのことに関わる記録が、野津龍『隠岐の伝説』(日本写真出版、昭和五二年)の「船親王と石川永年」に出てくる。それによると、奈良時代の後期に「和氣王の謀反」があり、船親王ふねのおみと石川永年いしかわのえねが、相次いで今津に流されて、二人ともここで死んだとされ、近くの「親王塚」「国司塚」が、その塚であるという。また、石川は懐郷の念にかられて海岸にある「天が橋の洞穴」に隠れて暮らし、帰るチャンス伺ったが、果たせずに縊死いししたとされる。なお、「続日本紀」に配流の事実と縊死のことが記録されており、これに基づいた説話構成のようであ

る。続いて、天が橋に関わる次のような話を載せている。

それに、この海岸には「阿婆あまの浮き橋」あるいは「天が橋」という海に突き出た岩場があります。これは、永年が遠い都を望んで泣いているときに、たまたま一人の老婆が現れて、永年の焦慮を憐れみ、小石を海に投げ入れて造ったものです。しかし、それくらいではとても大海を埋め立てることはできず、老婆は間もなく飢えと疲れで死んでしまいました。長さはおよそ五十メートル、老婆が架けた橋なので「阿婆の浮き橋」といっています。

一説に、これはアマノジャクが架けた橋ともいわれています。アマノジャクが夜間この橋を造っていると、それをこっそり見ていた人が、

「いいことをするじゃないか」
と云ってひやかしたところ、途中でやめてしまったとも伝えられています。

この話のニュースソースが何に基づくのか不明であるが、石川永年を持ち出すのは、前述の「続日本紀」の記事に結びつけた伝説の歴史化といえる。しかし、それにしても老婆が小石を

投げ入れたというのは現実性の乏しい叙述であるし、「阿婆」にあまの訓をつけるのも唐突といえる。続くアマノジャクの話を含めて考えると、ここでは「天の橋」のアナロジが、話の構想に深くかかわっているのかもしれない。

しかし、それにしても「天が橋」の伝説が、坊さんが島前に架けようとした橋、石川永年を憐れんで老婆が架けた橋、アマノジャクが夜間に架けた橋といった三通りの説明が取り上げられている。「天が橋」の語や遺物をめぐる複数の異説があるのは、伝説が共同の規範力を失い個人レベルの段階にあることを意味しているのかもしれない。しかしながら、橋のある場所が火葬場、禁足の地、流人の隠れ場などといった不可侵のイメージに彩られているのは、ここが普通とは異なるシンボリックな場所を意味するのであろうか。いうなら、この「天が橋」が、特別の場所として意識されていることを示すもので、中村雄二郎のいう「象徴的なものとしての場所」(『共通感覚論』岩波現代文庫、二〇〇〇)、すなわちトポスとしての性格を帯びた空間領域ととらえることができる。「世俗的な空間と区別された意味での聖なる空間、つまり宗教的、神話的な空間」こそが、天が橋ということになる。架橋伝説をこの視点からとらえることで、新たな一面を浮かび上がらせることができそうである。

四、那久の「国引き伝説」と「島争い」

この今津から海岸沿いに西に行った都万地区つままに那久岬なぐがある。この那久岬を島前に引っぱって繋げようとする伝説がある。昭和五三年に地元の高校の生徒がまとめた『都万村の民話』によると、大人おおひとが那久岬を一晚のうちに縄をつけて島前に引っ張



国引き伝説のある那久岬

ろうとしたところ、あまんじゃくが鶏の真似をして「コケコッコー」と鳴いたために、引っ張ることをあきらめて、今のワンド（入江）が残ったという。この話を語った那久の金岡虎男宅を訪ねると、虎男氏は亡くなっていたが、昭和二年生まれのご子息の弘泰氏は健在で、父からこの話を聞

かされていたという。

那久岬是那久の集落から坂道を登っていった先にある。視界が開けてくると、断崖に建つ灯台が見え、その断崖から黒ずんだ岩場が海へと延びている。これが島前に縄で引こうとした岬で、その遙か先に見える島並みが島前の西ノ島である。この那久岬から西へ油井の集落に向かう道があり、そこにまつわる次のような話を、金岡弘泰氏さんから聞いた。

油井に那久から行こうとした人が、そこを通って行くわけですが、その時に岩の上に女がおって、長い髪を梳くしっていたが、（ああこれは、化け物んだ）と思って、「生しょうあるもんか、ないもんか」と言って、怒鳴ったそうですね。そしたら何もせずに。三回言ったら、その笑って、「ハッハッハッハッハ」と笑って、「浜しおぼの潮化けだわな」って、その女が言ったって。

「浜の潮化け」とは始めて聞くが、海の妖怪の一種なのであろう。大人やあまんじゃくの他に、「浜の潮化け」も登場するこの那久岬も、トポス的な場所として那久の人々には意識されているのであろう。

この「浜の潮化け」とも関連しそうな「あまんじゃく」について、弘泰氏に尋ねると、「あまんじゃくとは浜にいる女の化物だ」と即答した。「瓜子姫」の昔話のイメージから、アマンジャクは山の妖怪と単純に決め込んでいたが、海辺では海の妖怪となるのは自然なことといえる。それからすると、今津の橋架けをしようとしたアマンジャクも海の妖怪と考えるべきであろう。ただ、今津では橋を架けようとしたアマンジャクが、那久では邪魔をして成就させなかつたことで、役割が逆転しているが、同じく蹴裂伝説にかかわっている点は注目される。

ところで、岬をどこに引いていくか、あるいは橋をどこに架けるかという、二つの地点の関係をどのように理解したらいいのだろうか。今津の架橋伝説における流人の石川永年の場合には、架橋先が本土となるが、村上しみさんの話では隣島の島前を目ざすことになる。この架橋先の違いは、伝説を伝える側の主体の問題といえよう。すなわち、島での生活する人々にとつては、歴史上の人物の架橋先よりも目に見える島への架橋こそが、現実味のある話であることは言うまでもない。両地点の関係は、岬や橋を問題とする現実の生活認識に立脚し、その伝説を伝えている人々の意識の反映とみなすべきであろう。

そのことを考えるのにふさわしい話がある。油井の港で作業

していた人に聞いた話で、むかし都万村の津戸と島前の豊田との間に浮かぶ大森島について、両者で所有争いが起こる。双方から同時に舟を出して到着を競うことになり、島に近い豊田の舟が先に着きそうになる。慌てた津戸の舟の老人が、草履を脱いで先に島に投げたので、津戸の勝ちになったという。このタイプの話は隠岐ではポピュラーなものを見て、布施村の三峰島、津戸湾の前平島にも、同様の話が伝えられている。

境界の決着を謀る「行逢裁面」ゆきあいにめん伝説の島バージョンといえる。平面的な地図上によると不平等に見える境界の理由が、コミカルな行動で説明されているが、海上の島の場合には海草や貝類の採取権などが関わって深刻な問題でもある。こちらの方が島に近いのに、なぜ遠い方にある地域の所有なのかといった、非対称の現実を告発しているようにも見える。ただ、古くからそこを利用してきた既得権の問題もあり、単純に地図上からだけでは結論づけられないところがある。

ところで、こうした境界や所有争いの決着となる既成事実とは、長い地域の歴史の中の勢力関係によって形成されてきたのである。現実には見えないような歴史的経緯やネットワークが複雑に張り巡らされ、その上に立って地域の生活が営まれている。那久の金岡弘泰氏の奥さんの母は、向かいの島前の知夫ちぶの出身

で、赴任してきた教師と結婚して、道後ミチゴに移ってきたという。海に隔てられた地域間にも、人事の交流や仕事上の関係など無数の伏線が敷かれている。橋架け、国引きの二点の地域間も、そうした地域のネットワークの情報の上に築かれていると考えられる。そうした隠れた補助線を探すことも伝説研究の一つといえる。

五、島前の「神争い」と架橋伝説

島前の架橋伝説は、島前の神々の争いの中の一モチーフであるが、まずは神の争いから見よう。昭和四一年に刊行された『隠岐の伝説』（横山弥四郎、隠岐出版文化協会刊）に載った「媛ひめあらしい」は、次のような伝説である。

昔々ツウと昔の大昔、隠岐国がまだ憶伎三子島といつて居た頃、海士の島の宇受賀という所に、宇受加の命と申される神様が住んで居られました。その神様は、宇受賀を中心として海士の島を領して居られた土着の神さまで勢力のあつた方でありました。恰度その頃、島一つ離れた西の島宇賀という地に、ヒナマチ姫ノ命という、美しい姫神様

がお住居になつていました。宇受賀ノ命はどうかして、この美しい姫神様と結婚しようと思召して、神様に申し込みになりましたが、姫神様はなぜか良い御返事をなさいませんでした。しかし宇受賀ノ命はなほ度々同じ事を申越されますので、姫神様もお困りになつて、

「実はあなたと結婚するのはよろしいが、大山の神が恐ろしい。」

と申されました。大山の神と申されるのは、その頃西の島の美田にお住みになつていた神様で勇猛でもあり、また農業などもお上手で人民もよく服従していたお豪いお方でありましたが、この神様もやはりヒナマチ姫の美しい事を聞かれて恋して居られました。そしてこれも度々結婚を催促して居られました。

一人の姫神様に二人の男神様が恋されたのでありますから、自然争いが起りました。昔も今も恋の三角関係は仲々解決がむづかしい。姫神様もお困り遊ばして、

「お二人で力競べをして見せて下さい。妾は勝つたお方の御心に従いましょう。」

と約束されました。そこでお二人の男神様は、千引の岩を軽々と海土島と西の島から投げ合いをされました。巖いづの雄おたけ叫

高らかに野も山もゆるするというような勇ましい競技であったのでしよう。

こゝに天邪鬼あまじやくといういたずら者がありました。何れの時代にも野次はあるものです。その時そつと大山の神の袖を曳きましたので、大山の神の投岩は、途中の海へ落ちました。宇受加ノ神の投石は西の島の海岸に届きました。今ツブテの岩というのがそれです。大山の神は残念でなりませんから、

「なぜか今俺は敗けた、姫神は貴様にあげよう、併し一度では実力がわからぬから、今一度勝負をしよう」

と申されました。宇受加ノ命もいさぎよく承諾になつて、神様達の一番大切な焼火の山の榊と家督山の榊を賭けて、再び投石競技が始まりました。これを見た天邪鬼は、急に飛んで来て、今度は、そつと宇受加ノ命の袖を曳きましたから、岩は途中の海へ落ち、大山神の投石は家督山の絶頂に達しました。

「姫の代りに榊を取つた。」

と、大山神は悦び踊られた。今に家督山には榊が茂生せぬという事でありませぬ。また近い頃まで宇受加ノ社の祠官が、大山神社の前を通るには下馬せねば不思議に通行が出来な

かつたとい、ます。そしてこの宇受加ノ命と比奈麻知姫との間にお生れになつたのが、なぎら姫と申されまして、今海士村豊田の海岸に、明屋あけやという絶勝があります。それは比奈麻知姫の産所で屏風岩、タライ岩があるそうです。

海士町の宇受賀うずかにある宇受賀の神と、対岸の西ノ島町宇賀うが（以前は済の地にあり）にある比奈麻知姫、美田にある大山の神の



家督山にある磐石

三神による三角関係が話題となつてゐる。まずは女神の比奈麻知姫の争奪をめぐり、宇受賀の神と大山の神との磔つぎ投げの一回戦は、遠く磔を投げた宇受賀の神の勝ち、続いて神の争奪をめぐる二回戦は大山の神の勝ち。勝敗はいずれも天邪鬼の放逸な行為に左右される。伝説の遺物となる磔



石は、西ノ島町の海岸と家督山あかこに残り、また、家督山には榊が茂生しないという。ただ、西ノ島町の海岸の礫石は、現在存在しない。「榊争い」の伝説を載せた菱浦地区の広報「広報鏡浦」によると、「私達が子供の頃までではありませんでしたが戦後の海岸工事の礎石となってしまった」とある。夫婦となった宇受賀の神と比奈麻知の神の間にできたなざら姫（奈伎良比売）は、海士町豊田の明屋海岸を産所とし、記念の屏風岩、タライ岩が残される。

次に橋架け伝説について、海士町御波に住む濱谷包房氏から頂戴した書簡を紹介する。

家督の神さんは見上げるような大男であったそう。常に向かいの島の濟すえんさんの女神の所へ通っていたそう。ある時、時化で船では行かれなくなり、困ったらしい。そこで、

「そうだ道を作ればいいではないか」と思い、昼仕事をすれば人目に付き、なんだかんだとうるさいから、夜一晩で作ってしまうと思った。そこで、ある晩仕事にかかり、埋め立てにかかったそう。何分大きな男なので着物も大きく、袂たもと一杯の石を海の中へドブーンと落とし込んだと。

表Ⅰ 「神々の争いモチーフ構成」

番号	刊行年	資料名	姫争い	榊争い	出産	橋架け
①	昭和41年	隠岐の伝説	○	○	○	—
②	〃 43	黒木村誌	○	○	○	—
③	〃 51	島前の伝承	—	—	—	○
④	〃 51	島前の民話	—	○	—	—
⑤	〃 52	隠岐・島前民話集	—	○	—	○
⑥	〃 52	出雲隠岐の伝説	○	○	○	—
⑦	〃 52	隠岐島の伝説	○	○	○	—
⑧	平成9年	広報鏡浦	—	○	—	○
⑨	平成28年	濱谷包房稿本	○	○	—	○

資料 ①隠岐の伝説（横山弥四郎、島根出版文化協会）。②黒木村誌（永海一正、黒木村誌編集委員会）。③島前の伝承（隠岐島前高校、島前の伝承第4号）。④島前の民話（民話と文学の会、孔版）。⑤隠岐・島前民話集（島根大学昔話研究会）。⑥出雲隠岐の伝説（石塚尊俊、第一法規出版）。⑦隠岐島の伝説（野津龍、日本写真出版）。⑧広報鏡浦（第10号）。⑨濱谷包房稿本（濱谷氏の手紙）

表Ⅱ 「橋架けモチーフ」

	資料名	架橋神	相手の神	架橋の目的	遺物
③	島前の伝承	家督神	住吉神（済）	一夜架橋の賭け	石は菱浦の浜
⑤	隠岐・島前民話集	家督神	焼火神	榊と橋の交換	—
⑧	広報鏡浦	家督神	—	渡航不便の解消	鴨島
⑨	濱谷包房稿本	家督神	済の神	通婚の便宜	島一つ

そうすると、一回だけの石で島が一つできたそうさ。

「うん、この調子で行けば夜明けまでにはできるぞ」と思い、二杯目の石を袂に入れかけたところが、どこかで鶏がコケコッコと鳴いたそうさ。

「あれ、もう夜明けになったか」と思いながら、残念だが仕方がないと仕事を止めたそうじゃ。だから宇賀への埋め立て工事は、島一つだけで終わったそうさ。

「済さんの女神」とは宇賀の神（前述の比奈麻知姫）のことであるが、濱谷氏の「橋架け」の話では、この済さんに通っていくのは、宇賀の神ではなく、榊の争奪に登場してきた家督の神と交替している。口承の伝説では、こうした変化はしばしば見られることである。

管見によると、戦後に記録された神々の争いの伝説の活字資料は九点ある。それらの構成モチーフの異同を見るために、表Ⅰ「神々の争いモチーフ構成」を作成してみた。これによると①②⑥⑦はモチーフがみな一致しているので、書承による関係が深いといえる。特に、⑥⑦は隠岐の伝説を広く集めて紹介した資料集であり、①や②を参考にしたと思われる。それ以外の③④⑤は、直接の聞き取りに基づいており、また、⑧⑨は地域

に在住する方の記述である。これらは純然たる口承に基づいていると考えられる。

以上の伝承事情を確認した上で、続いて橋架けモチーフの話进行分析していきたい。橋架けのモチーフの違いをはっきりさせるために、表Ⅱ「橋架けモチーフ」を作成した。これによると、橋架けしようとする神はすべて家督山の神で、相手の神はそれぞれ異なり、⑧には登場しない。なお、③の住吉の神は済の神の聞き間違いによる記録の可能性がある。家督山の神が架橋すること、架橋の目的が一定しないこととは関係があり、この伝説の解釈に変化が表われていることを意味している。架橋が未完成に終わったことの遺物を、⑧で鴨島かもじまと特定するのは、ふだん身近に接する機会が多いからと思われる。

ところで、口頭伝承における架橋伝説を、神々の争い伝説の全体の中であらえようと、宇売賀の神や宇賀(済)の神が後退し、家督の神が前面に出てきている。神々の争いの主役の神々、すなわち宇売賀、宇賀(比奈麻知姫)、大山(焼火山)、奈伎良姫の印象が薄らいできている。この四柱の神は、十世紀初めの『延喜式神名帳』の「隱岐国十六座」に名を連ねる神々である。古くからの神であることは、同時にこれらの神を奉祭する人々が、早くからそれぞれの地区に住み着き活動していたことを示して

いる。

さらに注目すべきは、海士町の宇売賀、豊田、西ノ島の宇賀(以前の済は島の北端にある)はみな島の北部に位置しており、航海者の信仰の篤い焼火山を含めて、それぞれが海と関わりの深い地域であったという点である。そのことを示す一例として、『日本後記』の延暦一八年(七九九)に渤海使の内蔵宿禰かちまろが帰朝の際に漂流し、済にあつた比奈麻知比売の火を見て助かったことが記される。また、『隱岐の伝説』の「豊田」に、伊予の国から船出した奈伎良比売が、漂流の末に豊田に無事漂着して、ここに祀られたとも記される。この地域が、古代史における渤海や新羅との交流や防備の前線の役割を果たしてきた(『隱岐の歴史』今井書店、一九六五。『隱岐島の歴史地理学的研究』古今書院、一九七九)ことと、延喜式神社としての社格を有していたこととは無関係ではあるまい。神々の争いの伝説を、こうした歴史的事実を踏まえ構成されたと考えた場合、この地がトポスとしての空間性を歴史的に形成してきたと理解してよいであろう。

ただ、そのことは神々の世界だけでなく、島に生きる生活や地理的環境をもとに評価していく必要がある。なぜなら、神々の結婚や争いは、実は人間のドラマでもあったからである。